

幕末明治の写真師列伝 第三十四回 鈴木真一 その五

明治30年(1896)5月、鈴木真(初代鈴木真一)は隠居することとして、長男の伊三郎へ家督を譲ると同時に、この伊三郎も「真一」と改名することになった。このため婿養子となった岡本圭三と伊三郎の二人がそれぞれ「鈴木真一」を襲名することになり、話がややこしくなる。鈴木真(初代鈴木真一)の隠居については、『過去次第記』の記述によれば、「明治三十一年戸主伊三良ヲ養子トシ、一旦横浜へ入籍セシメ、然ル後下田鈴木与七家督相続ノ為メ籍ヲ下田へ送ル」とあるが、昭和4年時点の鈴木家の除籍簿本によれば、「明治30年5月、前戸主真一隠居により家督を相続」とあるので、今回はそちらを採ることにした。また、『過去次第記』の記述によれば、横浜の真砂町の写真館については、「明治廿五年伊三良ニ譲リ、東京小石川小日向台町三丁目九十二番地へ隠居ス」(著者註：正確な番地としては九十三番地が正しい)とあるので、このことからすでに明治25年(1891)には、伊三郎が横浜真砂町の写真館の館主となっていたようだ。

伊三郎は最初、かつという女性と結婚して、長女、寿子を儲けるが、かつがすぐに亡くなってしまい、後妻として福地源一郎(桜痴)の娘で喜久(きく)と再婚する。そして、喜久との間は円満で、幼少の中に亡くなる子もいたが、次々と子供も生まれ、さらに二人の娘ができ、次女は弥生、三女は絹子という名ようだ。また、伊三郎の事業の方は順調でその後も精力的に仕事をこなしていたという。

先に伊三郎が「鈴木真一」を襲名したと記したが、実はこれにはわけがある。というのも二代目・鈴木真一(岡本圭三)は東京で名実ともに第一流の写真師となってその弟子たちも数多くいたのだが、財を成すにつれ、実業家としての夢を持つようになり、日清戦争の時に海運、船舶業がこれからの有望な事業になると察して、新たに二隻の船を購入して、海運業を始めることにした。最初、この事業は順調で営業成績も良好であった。しかし、元々この事業の経験が乏しかったこともあり、新造船が立て続けに嵐の為、遭難して、積み荷だけでなく数多くの死者も出してしまった。そのため写真館、家も土地も財産も全て処分してこの事後処理に当たり、明治35年(1901)頃には二代目・鈴木真一の名も鈴木真(初代鈴木真一)に返上して、妻の信子と共に裸一貫からのやり直しとなってしまったのである。このため、二代目・鈴木真一の名は伊三郎が襲名することとなったのであろう。伊三郎は二代目・鈴木真一として、明治43年(1909)頃までは写真館を営業していたようである。

明治28年(1894)9月11日、鈴木真(初代鈴木真一)の娘、ヨニ子は、陸軍士官三原三郎と結婚する。その後、ヨニ子は三原三郎の勤務地である千葉県佐倉に行くことになった。三原三郎は福岡県三池郡三池町大字新町百八十番地の僧侶、三原養仙の次男で、明治17年(1883)に陸軍士官学校を卒業して、日清戦争にも従軍した軍人であった。翌明治31年(1897)には長女、静子、明治33年(1899)11月11日には長男、武彦が産まれた。

明治35年(1901)夏、長き海外生活を終えて、四十(よそ)が帰国する。四十は英国グラスゴー大学を卒業した後、

アメリカに渡り、フィラデルフィアのボールドウィン工場の製図室に勤務していた。しかしながら母、美遠子が再三すすめる結婚の話からついに帰国することになったのである。

ところがである、四十はイギリス人の女性ジェシーを連れて帰国した。この女性は四十がまだ英国グラスゴー大学に留学していた時代に下宿していた家の姉妹の姉妹であった。四十はこの四十と十歳年下のイギリス人の娘と結婚したことを、鈴木真(初代鈴木真一)に認めてくれるように願ったが、鈴木真(初代鈴木真一)は猛反対であった。しかしながらこの娘が自らの名も「英子」と日本風の名に改め、四十の妻として祖国を捨て日本に骨を埋める決心であったことと、妻、美遠子の説得もあり、ついにはこの結婚について認めることにした。認めた後の鈴木真(初代鈴木真一)の態度は優しくかったという。

そして、四十の帰国後の就職先もセール・フレーザー株式会社という英国系貿易会社に決まった。この会社は、元は横浜でセール商会とフレーザー商会という二つの会社であったが、四十が入社後の明治30年に合併してセール・フレーザー株式会社(Sale and Fraser Co.)となった大手商社(本社は麹町区八重洲町一丁目一番地)であった。その主な取扱商品としては、蒸気及び電気機関車、蒸気及び鉄道用品各種とその材料、蒸気及び電気用諸機械、水力電気用諸機械、鉄道用客貨車及び電車、艦船用諸材料、兵器及びその諸材料、各種銅鉄材料、各種銅鉄管類、各種ガス発生機械類、肥料、英国炭、コークス、火セメントなどなどであったが、他に銀行業も行ってた。四十はその会社で機械部長として迎えられた。

また、東京小石川小日向台町三丁目九十三番地の家もこの四十が土地を買い求めて、四十自身が設計し、アメリカ人の建築士に建てさせた白漆喰のモダンな家で日本庭園もあった。四十はこの家に隠居した鈴木真(初代鈴木真一)と美遠子を引き取って住まわせることにした。そして翌明治36年(1902)に長男のディック(日本名は真)が、明治38年(1904)には長女、ネティ(日本名は安)、明治42年(1908)に次男、アーサー(日本名は朝二郎)が産まれる。この四十の妻、英子は心優しく知性溢れる女性であったという。夫の両親につくし、親族とのつき合いにも努力して、日本文化にも興味を示して美遠子より着物の着付けも習い、お茶や生け花も学んだ。また義妹、ヨニ子ともすぐに仲良くなった。

隠居後の鈴木真(初代鈴木真一)は、東京小石川小日向台町三丁目九十三番地の家で画と彫刻を趣味として毎日を過ごした。そのためこの家の敷地内にアトリエを設けて習作に専念したという。このアトリエは後に「礫庵」と名付け、裏木戸口にも「礫庵」という表札を掲げた。そして、自分の号としても「礫庵久米仙人」と称した。これは古代の神話で大和朝廷の親衛隊として活躍した久米氏にあやかり、久米仙人と名乗ったもので、人生について人に聞かれると、「瓦礫の道を歩むがごとし」と答えていたという。

(森重和雄)